

2024 年度

博士論文要旨

(指導教員：小林 誠)

論文題名 異質な他者とともに生きる：
在日カンボジア人の生き方から学ぶ

英文題名 How to Live with the Others:
Learning from the Experiences of
the Cambodians living in Japan

東京経済大学大学院
コミュニケーション学研究科博士後期課程
氏名 濱野 敏子

論文要旨

日本では、1980 年代以降のインドシナ定住難民やニューカマーと呼ばれる外国人の来日とともに多民族・多文化が急速に進んでいる。しかし、よそ者排除の傾向の強い日本社会の中で、多くの在日外国人は疎外感を持ち、また生活上の問題を抱えている。一方で、日本人である私たちは均一・同質を旨とする習慣・制度の中で身の安全を守ることに必死である。このような誰にとっても生きづらい状況を変えて、世界に開かれた多様性のある社会の形成が急務である。そのための具体的な方法、それは単なるやり方としてではなく、生き方としてどのようなものか、これが本稿の主要な問題関心である。

祖国の混乱によって国外へ脱出し、異文化の日本社会でさまざまな困難や危機に直面し、試行錯誤しながらそれらを乗り越え、新たな地平に向かって歩んでいる在日カンボジア人は、日本人が知らない多くの貴重な経験と知を持っている。この経験と知の中に、閉塞的な日本社会が世界に開かれていくヒントがあるかもしれない。このように考え、在日カンボジア人の生き方を通して本稿の問題関心へのアプローチとすることとした。

本稿の目的は、難民となって来日したカンボジア人がどのように困難や危機を乗り越え、いかに新たな地平に向かっていくかについて、周囲の多様な他者（人間、モノ）との関係に注目し、考察することである。そして、その生き方から私たち日本人が別様の生き方を学ぶことである。

調査方法は、対話構築的インタビューを通したライフストーリーを中心に、関連するイベントにおける参与観察、ならびに文献、資料によった。対話構築的インタビューとは、聞き手と語り手の相互作用によって語りが構築され、その語りは両者の共同制作となる。ライフストーリーとは、個人の人生、生活、生き方の口述の物語であり、また自己の生活世界、そして社会や文化の諸相を読み解くための質的調査法の一つでもある。

構成と概要は、以下の通りである。「第 1 章 本稿の解釈のための道標」では、人類学者ティム・インゴルドの思想「生きていること」を出発点にして、「応答プロセス」という独自の解釈の道標を設定した。その設定に至る過程を、「応答」「絡みあい」「メッシュワーク」「移動」というキーワードを用いて順を追って説明し、「異質な他者とともに生きる」という本稿の主題へ至る道筋を示した。「応答プロセス」は、環境(社会と自然の融合)の中で、他者（人間と人間以外を含むすべての存在）と出会い、絡みあい、ともに出来事を経験し、世界の形成に参加するプロセスである。それは、生きているものは絶えず生成変化していく生の流れの中にあることを表現している。

「第 2 章 在日カンボジア人とは」では、在日カンボジア人並びにカンボジア定住難民の概要とその生活実態、課題についてこれまでの知見を整理し、検討した。カンボジア定住難民とは、日本政府が定住を前提に正式に日本へ迎え入れたインドシナ 3 カ国の難民のうちのカンボジア

出身者である。1980 年の受け入れ開始から 2005 年の終了までに 1357 人が来日した。その他に、難民が呼び寄せた家族や親戚、あるいは留学生として来日したが帰国できなくなった人などを含めて「難民につながる人」とする。本稿で紹介する人々はここに含まれる。これらの人々を「難民」という位置付けではなく、「異質な他者とともに生きる人」と位置付けた。なぜなら、本稿はこの人々の「生き方」を探求する研究であって、難民研究ではないからである。このことから、在日カンボジア定住難民ではなく、「在日カンボジア人」という名称を用いることとした。

先行研究を通して、在日カンボジア人たちが就業や学校適応などの社会生活において困難な状況に置かれていたこと、その背景として日本社会の排他的、同質的な傾向が指摘された。これらの知見によって社会的な問題解決へとつながっていったが、先行研究の多くがそれらの問題点に集中するあまり、在日カンボジア人に社会的弱者という負のイメージを植え付けたことを問題提起した。そこで、本稿ではこの在日カンボジア人に対する負のイメージを是正することを意図し、ポジティブな側面を前景させることとした。また、先行研究では生活経験の一部を取り上げて検討する研究がほとんどであり、その生のプロセス全体から捉える視点は十分ではなかった。ゆえに本稿では、生の全体から部分を見ていくことを基本とした。

第 3 章から第 5 章は、在日カンボジア人のライフストーリーである。「第 3 章 希望を生きる在日カンボジア人 1.5 世」では、幼少期にタイの難民キャンプへ避難し、学齢期に来日した 1.5 世の P さんが不確定な状況の中で、国籍や民族の異なる多様な他者と関わり、希望と落胆を繰り返しながら人生を学び、危機を乗り越え、成長していくプロセスを描いた。P さんの生き方は、直面する困難に対して、「ありのままの現実に、ありのままの自分で向かい合う」ことであった。

「第 4 章 経験を継承する在日カンボジア人 1.5 世」では、成人となった 1.5 世が自身の困難や危機、葛藤、そして喜びの経験を次世代のより良い未来に向けて継承していこうとする過程を描いた。来日時に 8 歳だった N さんは、小学校で同級生の差別的な態度によって自分の「異質性」を内面化し、「外国人」である自分を否定した。しかし高校という新しい環境の中で、多様な背景を持つ学友たちとの交流をとおして、自分の中の壁を取り去り、大きな飛躍を遂げていった。その N さんの生き方は、「お互いの特質を尊重し合い、自分らしさを大切にする」ということであった。そして、N さんは子どもには「二つの国の良さを伝えていきたい」と述べた。同じ第 4 章の M さんは、難民であった父親の呼び寄せでカンボジアから 14 歳の時に来日し、日本人ボランティアとの出会いと交流を通して順調な社会生活を営み、大好きな勉強もできた。しかし就職活動の際に外国人差別に直面したことによって、日本に生きるカンボジア人としての自分の立場と役割を考えだした。そして、次世代の若いカンボジア人たちに同じ経験をさせたくない、より良い将来を準備したいと考え、異議申し立てを行いその理不尽な制度を撤回させた。「日本に生きるカンボジア人として自分の役割を果たす」ことが M さんの生き方となった。そして、子

どもには、「カンボジア人であることを忘れてほしくない」と語った。

「第5章 モノとともに生きる在日カンボジア人」は、「異質な他者」を人間以外のモノに広げ、故郷に全てを置いて日本に移住したカンボジア人がモノを通して過去の記憶を想起し、あるいは想像することによって現在を生き、新しい知へ開かれていく過程を描いた。Sさんは、ある絵画との出会いによって、幼少期に別れた実母との関係を問い直す対話が始まった。そして、実母への懷疑から和解へとすすみ、心の空洞が埋められ、アイデンティティの再統合を果たした。それは、「自分では変えられない過去を受け止め、現在を見つめてすすむ」という生き方となった。同じ第5章のMSさんは、母から譲り受けた銀塊に長い時間を経て出会い直し、それによって難民時代の苦難と喜びの記憶を想起し、その時には気づかなかった母の思いに至り、自分の人生に感謝した。そして、現在はカンボジアの子どものためのさまざまなボランティア活動を行っている。MSさんの生き方は、「他者によって助けられ、他者を助ける」であった。

以上の第3章から第5章のライフストーリーにおける「異質な他者」の位相は、異なる属性によった。第3章では国籍や民族の異なる共時的な他者、第4章は世代の異なる通時的な他者、第5章は人間ではないモノという種差的な他者であった。しかし、この属性による違いは、次の第6章の全体考察を通して再考されることになった。

「終章」は、2部構成である。「第一部 『応答プロセス』と在日カンボジア人の生き方」では、まず「応答プロセス」を促進する事例と阻害する事例を比較検討し、「応答プロセス」の生き方の特徴を浮き彫りにした。促進の要因は、他者との「絡みあい」という関係性と「メッシュワーク」という生の領域にあり、阻害する要因は、他者を「カテゴリー化・対象化」する関係性にあった。事例において、「絡みあい」は「ありのままで付き合う」「お互いの価値を認め合う」「心の空洞が埋められる」「いのちの交換」といった言葉で表現され、「メッシュワーク」はそれが活性化している時は危機をすり抜けるための下力として働き、新しい地平に向かう基盤となった。一方で、「メッシュワーク」が不活性な場合、他者への偏見や排除が顕現された。第二の考察は、「応答プロセス」を導く背景としての「移動」を取り上げた。在日カンボジア人の日本への移動は、文化の移動し、世代の移動し、過去から現在への時間の移動を導き、これらに伴ってものの見方が変化し、新しい生き方に方向転換した。このことを「知の移動」として、事例とともに論じた。第三の考察では、「知の移動」が「異質な他者とともに生きること」によって起こることを論じた。在日カンボジア人は見知らぬ社会に参入し、生きていくために多様な知を必要とした。そのためには、多様な知を持つ他者と出会い、学ぶ必要があった。移動によって出会う他者に前提条件や先入観はない。知を得るためには他者の国籍や民族、世代や性、さらには種といった所与の属性は意味がなく、より始原的な関係によってつながることが示された。「移動」は、このような異質な他者との出会いと関係性を導くことを示した。ここで、移動を契機とした

在日カンボジア人の「応答プロセス」の全体像が明らかとなった。

「第二部 在日カンボジア人の生き方から学ぶこと」は、第一部で明らかとなった在日カンボジア人の「応答プロセス」の生き方から、私たち日本人が何を学ぶことができるかについて論じた。まず、5人のライフストーリーや先行研究、文献・資料から示された日本人の「他者を対象化」し「よそ者を排除」する問題について、以下のように述べた。明治以来の日本社会は、西洋近代的文明観・人間観と資本主義的経済という国家の政策のもとで形成されていった。その体制の中で、原子化した個人は「自己実現」や「自己利益」を追求し、その集合体である社会は「開発」や「進歩」という名のもとで生命と暮らしを破壊し、祖先や過去を忘れて未来を見通せない状態に陥っている。この状態から脱出し新しい地平を開くために、在日カンボジア人の「応答プロセス」の生き方から別の生き方を学ぶことができるとした。その具体的な点として1) 異質であることが当たり前の生活と態度 2) 異質な他者との始原的な絡みあいによるつながり 3) 自己のルーツとしての祖先の生き方や過去の出来事から学ぶことをあげた。

最後に、本稿の限界と留意点について述べた。事例の在日カンボジア人たちの生き方は、在日カンボジア人の生き方を代表するものではなく、また個人の生き方を評価・判断するものではなく、本稿の意図は事例を通して「応答プロセス」の生き方の内実と意味を具体的に提示することにあった。もう一点は、「メッシュワーク」の重要性について考察で論じたが、その詳細な様相を事例の中で十分に描くまでに至らず、今後の課題とすることを述べた。